

# いもち病高度汚染籾に対する種子消毒剤 および温湯消毒の消毒効果

兵庫県立農林水産技術総合センター 病害虫部 <sup>うちほし</sup>内橋 <sup>かいち</sup>嘉一・<sup>かんとく</sup>神頭 <sup>たけし</sup>武嗣・<sup>まえかわ</sup>前川 <sup>かづまさ</sup>和正・<sup>あいの</sup>相野 <sup>まさたか</sup>公孝

## はじめに

イネいもち病は *Pyricularia oryzae* (異名: *Magnaporthe oryzae*) による病害で、水稻栽培において最も警戒すべき重要病害である。兵庫県においては、近年県南部で9月中旬収穫の早期作型から10月中旬収穫の普通期作型への切り替えが進み、播種時や移植時に施薬した薬剤の効果が減退した後に県内水稻作付面積約38,000 haのうち約10,000 haで発生が見られる。

また、6月上旬の定植時に施薬した箱施薬剤の効果が減退する7月下旬の梅雨明け以降、出穂前後の8～9月にかけて比較的高い頻度で降雨がある中山間地では、葉いもちや穂いもちの多発生が見られる。いもち病の防除においては長期残効性を有する苗箱施薬剤として、1971年にトリシクラゾール粒剤、1974年にプロベナゾール粒剤、1997年にカルプロバミド粒剤、2003年にチアジニル粒剤、2006年にオリサストロビン粒剤および2010年にイソチアニル粒剤が農薬登録され、いもち病防除の基幹となり、効果を上げた。しかし、本県では2003年にはカルプロバミド粒剤に(岩本ら, 2007)、2013年にはオリサストロビン粒剤に(内橋ら, 2014)、薬剤耐性菌が発生し、上市後期間をおかず使用が自粛された(図-1)。

QoI 剤は、いもち病に効果が強く県内で広く使われていたが、2013年に県内広域で耐性菌が発生したためその後の箱施薬剤は、プロベナゾール粒剤およびイソチアニル粒剤が主力となった。また、使用できる剤数が限られている分、より効率的・効果的に防除する必要性が増した。

## I いもち病の伝染の特徴

いもち病は種子伝染することが知られており、その一次伝染源は、*Poryzae* による罹病籾である(原澤,



図-1 2013年6月にQoI剤施用圃場で多発したいもち病

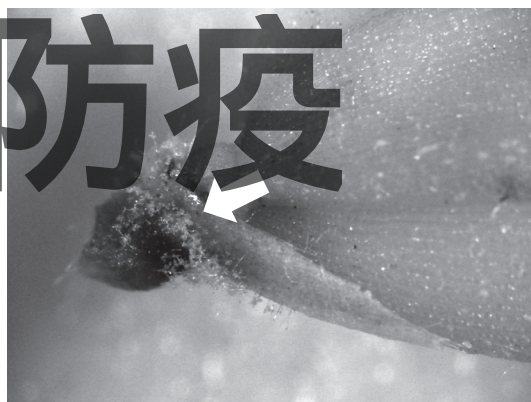


図-2 無処理の籾の護穎に形成されたいもち病菌分生子

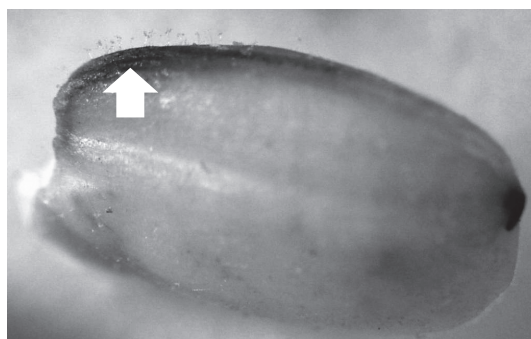


図-3 無処理の玄米の背縦溝部分に形成されたいもち病菌分生子

The Effect of Disinfection to Seed Which is Severely Damaged by *Pyricularia oryzae*. By Kaichi UCHIHASHI, Takeshi KANTO, Kazumasa MAEKAWA and Masataka AINO

(キーワード: イネいもち病, 種子消毒, DMI 剤, ペノミル剤, 温湯消毒, 玄米被害度)